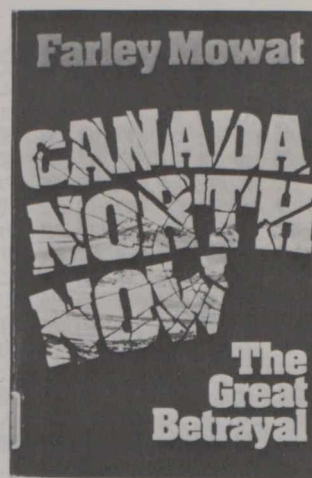


ファリー・モーワットの世界



エスキモーと インディアンと 狼と フクロウと

ファリー・モーワット。博物学者でユーモア作家。変人。くじらや狼の味方。エスキモーとインディアンの代言人。旅行家。隠とん者。ラム酒の愛飲家。そして受賞作を含む二十四冊もの本の著者。

カナダ北方の美しさ、ドラマ、そして残忍さについて書き続けてきたファリー・モーワットほど、カナダで親しまれている物語作家はおそらくいない。彼の評判は国内だけではない。モーワットの作品はすでに二十四以上の言葉に翻訳され、その発行部数は世界中で三百万を超えて各国の数多くの読者を魅了してきた。一九五二年に最初の作品が出版されて以

来、彼はさまざまな子供や大人向けの本の裏表紙から、もじやもじやの赤ひげに囲まれたあのいたずらっぽそうな顔をのぞかせてきたのである。

モーワットは一九二一年、オンタリオ州ベルビルで生まれた。父親が図書館の司書をしていたため、幼少時代をベルビルからトレントン、ウインザー（いずれもトロント南部の町）と転々としたあと、十二才のときカナダ中部の大平原にあるサスカチュワン州サスカトゥーンに引越した。モーワットはそこでまじめに鳥の観察を始め、ひまがあると川沿いや原っぱ、あるいは自分の家の近くで新種の鳥を探し求めるようになる。

モーワットの家族はのちにトロントへ移ったが、あいかわらず鳥や動物が好きなのは、学校で博物学に熱中した。やがて戦争が始まり、カナダ陸軍に入隊して、イタリア、ベルギー、オランダで戦闘に参加する。戦争が終わると、モーワットはカナダに帰り、北極への旅に出た。自然に対する彼の興味は、すでに純粹に科学的なものから、文学的なものへと変わっていた。

モーワットは、雑誌に北方の人々や動物について書きはじめた。一九五二年に最初の本「People of the Deer」トナカイ族の人々が出版された。この作品はたちまち大評判を呼び、世界的なベストセラーになった。



「トナカイ族の人々」は、モーワットが二年間も一緒に生活を共にしたイハルミウト族エスキモーがテーマになっている。「これらの人びとは」——彼は書いている——「ツンドラ地帯の情容赦のない自然に対する厳しい闘いに、その全力をしばって生きてきた。地理的な障害物は、われわれのようにそれをならしてしまうのではなく、それに順応することによって乗り越えた。」

この作品で成功を収めたモーワットは、次々と本を書き、テレビやラジオにも出演した。これらの中で、彼は強く野性動物の保護を訴え、環境破壊に抗議し、文明がインディアンやエスキモーの伝統的生活様式をいかに破壊してきたかを嘆いた。このため、エスキモーは彼のことを「キブメトナ」——うるさい小犬」とでも訳したらいいだろうか——と称しているほどである。

モーワットを人生の傍観者だと呼ぶ人

はいまい。彼は調査のために国のはてまで旅し、オンタリオ北部に自分で建てた丸太小屋や同州南部の小さな町で古い農家に住み、ニューファンドランドの遠く離れた漁村で暮らし、帆船に乗ってカナダの東部沿岸を回遊したこともある。彼は人生のあらゆる点で行動者であり、そのことが彼をカナダ文壇における最も興味深く、また最も楽しめる人物の一人にしている。

モーワットは、処女作「トナカイ族の人々」のほかに、北方の荒涼地について「Lost in the Barrens」バレナランド脱出作戦」とその後編「The Curse of the Viking Grave」バイキング墓の宝」の二冊を書いている。両方とも孤児ジャミー・マックネアが友達インディアンといろいろ冒険する話で、一応子供向きではあるが、大人でもわくわくしてしまう作品である。モーワットは、いずれもノン・フィクションだといっている。「フィクション（作りごと）」といううなものがあるとは、私には思えない。私が書くのは、主観的なノン・フィクションだ。事実はおそらくそうだったが、ろう、というところから書くわけだが、いつも現実が基礎になっている。芸術家の仕事は潤色し、集約することにある。しかし誰も新しく何かを作り出すわけではない。私が書くときは、自分を何か別の状況に投入する、つまり自分で（その作品を）生きることになる。「バレナランド脱出作戦」の話は、まさにその作品の通りに自分が生きたいと思った、そういう話だ。」

深海からの救助を扱った「The Grey